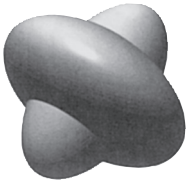

2025年度大学主催秋季人権問題講演会

「『支える』から『一緒にやる』へ ～福島で育んだ協働の輪～」

（東京大学アイソトープ総合センター 教授）
秋　光　信　佳

今日は関西学院大学秋季人権問題講演会にお呼びいただき、ありがとうございます。私は東京大学の秋光と申します。今日は、私が福島で体験した「支える」から「一緒にやる」といったことを皆さまと共有することで、人権問題について考える一つのきっかけにしていただければと思っています。

人権を実感としてわれわれが感じるのは、人と人とのつながりにおいてだと思います。人との関係性の中で人権が大事に扱われているかとか、場合によっては、それが侵されているといった感覚をわれわれは自然と持つと思います。今日の話を通じて、「人との関わり」に関する私の体験を皆さまと共有することが人権を考える一つのきっかけになるのではないかと考え、協働の輪を育んだ一つの例を紹介させていただこうと思います。

2011年３月11日、東北地方で大きな地震が起きました。東日本大震災です。これは歴史的にも非常に大きな地震で、日本の観測史上最大規模のものであり、1900年以降、世界で起きた地震の中でも４番目の規模と言われています。東日本大震災は東北地方の沿岸部を中心に人的にも物的にも非常に大きな被害をもたらしました。

神戸では1995年、30年前に阪神・淡路大震災が起きました。阪神・淡路大震災によって多くの方が被災されたと思いますが、その復興のためにボランティアとしていろんな人たちがやってきたと思います。その中でいろいろな人間関係ができていったのではないでしょうか。皆さまの中にもそういった話をお聞きになった方もいるかもしれません。若い方はお話として聞いただけかもしれませんが、今日、オンライン等でこの講演をお聞きになっている方の中には、実際に体験された方もおられるかもしれません。

阪神・淡路大震災が起こった時、私は大学院生でした。朝、研究室に行くとラジオから緊迫した声が流れていて、時間を追うごとに被災された方、あるいは亡くなられた方の数がどんどん増えていきました。本当にどきどきしながらラジオに耳を傾けていたことを思い出します。

地震で被災したという点では、神戸と福島とでは、ある意味、共通するところがあるかもしれません。ただ、福島と神戸とで違うところがあるとすれば、福島は地震に続いて原子力災害に見舞われたという点です。福島には第一原発、第二原発という二つの原子力発電所がありますが、この原子力発電所が地震により津波被害を受け、電源喪失してしまったのです。

原子力発電所は電気を作るところですから、自分のところで作った電気を使えばいいじゃないか、なぜ電源喪失するなんてことが

起きるのだろうと不思議に思われるかもしれません。実は原子力発電所は、外部から電気を供給しないと正常に動かすことができないのです。

原子力発電所の中心には原子炉というものがあって、これは放っておくとどんどん熱を出して暴走してしまいます。ですから原子炉を止めても外から電気を供給して冷やし続ける必要があります。ところが津波被害により沿岸地域は壊滅的打撃を受けて電柱や送電網が破壊されてしまいました。原子力発電所には緊急時のための自家発電設備や蓄電池がありますが、不運なことにこれらはすべて津波に飲み込まれて動かなくなってしまったのです。その結果、原子炉を冷やすことができずに暴走してしまい、原子力災害が起こってしまいました。

原子力災害には国際的な事故の尺度がありますが、その中でも最高レベル７に分類されました。レベル７の原子力発電所事故は、1986年に当時のソ連、今でいうウクライナで起きたチェルノブイリ原発事故です。人類の歴史の中でも非常に稀な事故が日本で起きてしまい、その結果、地域に非常に大きな災害をもたらしたのです。

３月11日20時50分、原子炉から半径２キロ圏内の住民の方を対象に福島県知事から避難指示が出されました。夜ご飯が終わって、そろそろ寝ようかというぐらいの時に避難しなさいと唐突に言われ、皆さん着の身着のまま避難を始めました。その後、21時23分に、今度は国から半径３キロ圏内に住む方に対して避難指示が出されました。つまり避難地域が広がったわけです。さらに半径10キロ圏内の方は屋内に退避するようにという指示が出ました。深刻な事故の状況が明らかになるに従い、翌日以降も避難指示範囲が段階的に広がっていきました。住民の方々にとっては、居住権や生存権、財産権といった人権ともかかわるさまざまな権利が侵害される深刻な人権侵害と言ってもいいようなことが起きたのです。

原子力発電所の事故が起きた原因については、いろいろな理由が考えられます。第一は、海底地震による津波が起きたためです。では、津波が起きたことによって、なぜ原子力発電所が暴走したのでしょうか。その原因を調査するため、国会事故調査委員会、政府事故調査委員会、民間事故調査委員会など各種の事故調査委員会が立ち上がりました。例えば、国会事故調査委員会は、今回の福島第一原子力発電所、福島第二原子力発電所の事故の原因は自然災害ではなく、人災だと断言しています。つまり人為的ミスやトラブルが積み重なり、多くの人々が避難せざるを得ない状況になりました。その結果、コミュニティの崩壊が起こったのです。コミュニティというのは普段生活している時にはあまり意識しないものですが、われわれが生きていく上において、あるいは自分が自分であるという存在基盤を意識する上においてとても大事なものです。事故の被災地では、それが失われていきました。

私は東京大学アイソトープ総合センターに所属しています。ラジオアイソトープというのは日本語で言うと同位体です。原子は中性子と陽子から成る原子核が中心にあって、その周囲を電子が飛んでいます。高校の理科で習った方もいらっしゃると思いますが、原子は陽子の数によって化学的性質が決まります。陽子の数が同じ原子であっても中性子の数が変わると原子の性質が変わることがあります。場合によってはそれが放射性物質といって放射線を出して別の物質に変わりま

す。これをラジオアイソトープ、つまり放射性同位元素と言いますが、これを研究するのが私の研究所のミッションです。

アイソトープ総合センターの教員は、放射線について日々研究し、放射線を利用している、いわゆる放射線の専門家です。われわれは事故直後、原子力災害によって環境中に大量にばらまかれた放射性物質について実態調査をしました。また、放射線が人体にどのような影響を及ぼし得るのか、放射線から身を守るためにどのようなことに気を付けなければならないのかといったことに詳しかったので防護活動を行いました。防護活動というのは放射線から身を守るための活動です。

事故直後、まず南相馬市に行きました。南相馬市は福島県の海沿いにある自治体で、原発よりも北側に位置しています。南相馬市の方々は子どもたちを放射線から守りたいという思いを強くお持ちでしたので、私たちは最初に保育園や幼稚園などで放射線の実態調査をしました。それからデッキブラシをかけて屋根や敷地の掃除をする除染作業もしました。

皆さんの中に防護服を着られたことがある方はほとんどおられないと思いますが、つなぎの服を着たことがある方はおられると思います。つなぎを着て、マスクを付け、長靴をはき、帽子をかぶるととても暑いのです。真冬でも防護服を着て１時間ブラシをかけて除染作業をしていると汗だくになります。これが夏になると本当に息苦しいし、汗もかくし、脱水症状になりそうな状態でした。この写真にあるように、あまりの暑さに帽子を取ってしまって活動することもありました。それぐらい放射線から身を守るための実態調査や防護活動は過酷なものでした。ただ、いくら過酷でも、困っている方のために科学者・専門家として力になりたいという思いがありましたので、全国からたくさんの科学者が地元にやってきて除染をはじめとした防護活動を行いました。

その中で私たちが目にしたものをご紹介します。これはある小学校の写真です。教室の中にランドセルや学用品が散乱しています。地震の後、子どもたちは学用品を置いたまま学校からあわてて避難したのでこんな状況になっているのです。震災当時、子どもたちはすぐに学校に戻れると思っていたと思います。地震がおさまって問題がなければ戻ってこられると。だからランドセルや学用品を置いていったわけです。ところが政府から原発から20キロ圏内の住民に対して避難指示が出されたため、戻ることができなくなりました。今もまだ原発のすぐ近くには帰還困難区域が残っていて、そういったところには14年以上たった今もなおこうした状況がタイムカプセルのように残されています。こういったものを見ると当時の子どもたちや、子どもたちを守っていかなければならなかった大人たちの大変な状況が分かります。

私たちは、そういった大変な状況にある方々の力になりたいと思いました。助けたいというとおこがましいですが、われわれがお役に立てることがあるなら何かしたい。そういう思いで、さまざまな大学の学者や研究者が被災地で活動したのです。また、ついてきてくれる学生を引率して、一緒に活動しました。国や自治体もこのような活動を支援してくれました。国の支援事業の一つに、復興知事業というものがあります。東日本大震災後の原発事故の被災地として福島県の太平洋沿岸地域にある15市町村が認定されていますが、この15市町村で活動する大学に対して国が旅費などの補助をしてくれました。それによって私たちはいろいろな活動を行うように

なりました。例えば、復興農学という活動があります。福島県は農業が非常に活発で米作りも盛んです。今は新米の季節ですので、福島に行くととてもおいしいお米が食べられます。また、夏には桃、秋には柿といった自然の恵みに満たされた恵まれた土地なのですが、原発事故による風評被害の影響で福島の農業は壊滅的な打撃を受けました。農業の打撃を回復するために農学部や風評被害を研究する社会学の先生たちが協力して復興農学を立ち上げ、福島の問題に取り組んでいます。それ以外にもこの地域の未来を担う子どもたちに大学が持つリソースを提供したり、あるいは地域にあるさまざまなリソース、魅力を開拓したりといったことにも協力させていただきました。そういった中でわれわれが一つ打ち出したのが人材育成です。

ボランティアとして入った当初は、自分たちにできることで地域のために役立つことをしたい、支えたいと考えていました。ところが長く活動していくうちに、逆に自分たちがさまざまなことを学んだり、体験したりする機会を得ているということに気が付きました。それによって、一方的に外からやってきて提供するという関係ではなく、その地域で活動する、共に時間を過ごす、共に何かをすることによってお互いに得るものがあるという対等な関係ができるのではないかと気付きました。そこで、地域の方と対話し、共に体験することによって地域の方もわれわれから何かを得るし、われわれも教育や研究といった観点からいろいろなものを得るといった対等な関係の構築を目指す人材育成プログラムの構築に取り組むことにしました。このプログラムを作って実行する過程で、大学生が被災地域に行くことが増えましたので、大学のサークルの学生たちに協力してもらって科学教室や出前教室などもしました。また、地域の魅力を開拓する事業などもやってきました。

われわれがしてきた学びの一つとして、フィールド学習というものがあります。このフィールド学習を通じてお互いに教え合い、学び合う関係を構築してきましたので、これについて少し紹介したいと思います。

＜動画再生＞

大学生が地域の方と話をする機会を持ったり、農業体験などをさせていただいたりしてきました。それによって学生たちが多くの学びを得ることができています。また、震災復興を考えることによってやっかいな問題、簡単に答えが出ない問題について考える機会を得ました。そして、地域の方とさまざまな活動を通じて協働する中で、われわれ大学が持つさまざまな資源、リソースと地域に存在する魅力との融合が新しい活動につながっていきました。

第一原発から南に20キロぐらいのところに楢葉町というまちがあります。ここは全町避難したまちでしたが、2015年に避難解除され、まちに人が戻ってきました。私は楢葉町の放射線の除染状況の評価に協力していましたので、まちに行く機会がありました。頻繁に楢葉町を訪れる中で仲良くなった坂本さんという役場職員の方がいました。たまたま坂本さんと話す中で、まちにあった文化財を保存する資料館が地震によって被害を受け、再開できずに困っているという話を聞きました。実際に様子を見てみると、楢葉町の資料館は、重要文化財に指定されている遺跡からの発掘資料が壊れて床に散乱するぐらいのひどい状況でした。

地震後の復旧復興はどうしてもインフラ整

備が優先的になります。そしてその後は、例えば、商店街などの復興を支援していきます。一方、文化的なものにはすぐには支援の手が及ばないのです。それこそ文化財は声も出しませんし話もできませんので、本当に無言のまま放置されているような状況になりがちです。そういったところにはなかなか光は当たらないのですが、文化財を含めた文化の復興、心の復興の重要性を認識し、心配している方が必ずいらっしゃるものです。このような問題意識を被災地から私は学んだのですが、当時の私は何も解決策を持っていませんでした。

東京大学は前身の東京開成学校から含めると150年にわたる長い歴史があるのですが、その長い歴史の中で国内外のさまざまな文化財を収集してきました。そういったものを大事に蔵の中に眠らせているだけではなく、展示することによって大学の研究成果を情報発信したり、あるいは皆さんに大学の学びを楽しんでもらったりする場として大学博物館を設けています。

博物館はものが増えるばかりで減ることは決してありません。坂本さんの話を聞いた後、たまたま大学博物館の関係者から、博物館では貴重な標本が大量に眠っていて日の目を見ていないという話を聞きました。この話を聞いた時、私はひらめきました。つまり、大学博物館に眠る資料を福島に持っていって、新しいコンセプトの展示を実現することで、自治体と大学博物館がお互いに有する問題を一挙に解決できるのではないかと思いついたのです。

最初はただの思いつきだったのですが、いろいろな関係者の方にこの話をしてみたら、いいね、と言ってくれる方がいました。逆に、そんなの無理ですよ、お金がいくら掛かると思っているのですかと言われる方もいました。震災からの復興復旧に精一杯だから博物館なんて作っても誰も来るわけがない。また地震、放射線の風評被害もあって観光客も来ないし、そんなものを作っても無駄だという意見も多々ありました。一筋縄ではいかないことがたくさんありました。しかしながら、賛同してくれる方が増えてきて、紆余曲折がある中で、大学と楢葉町との共同で博物館を作ろうという計画が実現に向けて動き出し始めたのです。

大学に保管してある10トントラック8台分の貴重な資料、例えば、遺跡から発掘された考古学試料や隕石、化石、鉱物などを大量に楢葉町に移設しました。そして地元の方と一緒に、どのような展示を作れば楽しんで見てもらえるか、思いが伝わるかといったことを話し合ってきました。

その中でわれわれが作ったコンセプトが「危機からの再生」と「未来創造」です。福島にとって東日本大震災、原子力災害は非常に大きな危機でした。われわれはこの危機から再生したい、そして未来を新しく作っていきたいという思いを表わしています。

東大に眠る博物資料を概観してみると、地球ができるところから原生生物に至るまで、人類智を含めて長い歴史を概観することができます。地球が生まれ、その上に生命が生まれ、育まれてきました。しかし常に危機的な状況で、時には絶滅の危機に瀕するような大きな災害もありました。けれども、そういった危機は常に新しい何かを生み出す母体となってきたと言えるのではないでしょうか。つまり僕ら生き物は立ち上がってきたからこそ、このようにして今も地球上に生きているわけです。一方、楢葉町の文化史に目を向けると、福島の浜通りは北の相馬藩と、南のい

わきに拠点を置く勢力という二つの大きな勢力に挟まれ、ボーダー地域として大変な危機に見舞われてきた歴史を持っていることを知りました。また、過去数千年というスパンで見ると、福島の太平洋沿岸地域は、何度も何度も地震と津波の被害を受け、危機を体験しています。しかし、そこから常に再生してきているのです。ですから、2011年の大震災の危機からも必ず再生できるだろうと。そして未来を創造できるという思いをわれわれの資料をもとに皆さんに届けられるのではないかということに思いをはせ、これをストーリーラインとして作り上げました。

ところが、われわれのプロジェクトも危機と再生そのものでした。それは、2020年頃にこのプロジェクトが動き始めた直後に世界中が新型コロナウイルス禍に見舞われたからです。コロナ禍でマスクをしながら地域の方々とミュージアムのコンセプトについて話をする場を設けたり、あるいはこれからやってくる資料を皆さんに紹介して、応援してくれるよう話をしたりしました。また、コロナ禍に加えて、2021年２月13日にはマグニチュード7.3という非常に大きな余震がこの地域を襲いました。阪神・淡路大震災の後も余震があったと思いますが、福島でも大震災から10年経っても余震が残っていました。この大きな余震によって、われわれが持ち込んだ資料も倒れてしまうことがありました。こうしたこともあり、われわれのプロジェクトは一筋縄では完成することはできませんでした。

しかし、そういった中でも私どもが大切にしたのは、一緒に手と手を携えて乗り越えようという気持ちでした。幾多の困難がありましたが、われわれはその困難を一つのバネとしてミュージアムのデザインを行いました。最初はラフスケッチから始まりましたが、そこからきちんとした枠に落とし込み、ミュージアムを作ることができました。

＜動画再生＞

この動画は内装が終わった後、展示資料を出している時の様子です。展示資料を配置している様子を見る機会はないと思いますが、展示資料の配置はぱっぱと作れるものではありません。博物館の先生と学生が協力して、どのように展示したら見やすく分かりやすいか、またその展示内容を皆さんに伝えやすいか、コンセプトを間違いなく届けることができるかといったところを話し合いながら一緒に作り上げます。このようにしてミュージアムが完成し、2023年に開館することができました。箱物を作って終わりにはしたくありませんでしたので、開館後もわれわれは「一緒にやる」ということを心掛けました。

これはその一例ですが、開館してからふた月に一度、ミュージアムに関連した市民講演会を行っています。例えば、ミュージアムでは地球の歴史について語っていますので、地球の岩石の話や地球ができたいわれである宇宙からのメッセージについての話をしました。また、地域の古文書を一緒に読み解くことによって地域の魅力を発見したり、あるいは戦国時代には、この地域は北と南の勢力の狭間で、時折、支配が変わって非常に大変な目に遭っていたそうですが、そういった地域の歴史を一緒に掘り起こして特別展示を行うといった活動を行ってきました。

その中でわれわれも学ぶことがたくさんありました。地方にはそれぞれの歴史や成り立ちがあるということを頭では分かっているのですが、東京にいると地域の魅力を実体験する機会はそれほど多くはありません。今回の

活動を通じて、地域の方に蔵に眠っている資料を見せていただいたり、あるいはそれらを元にどうすれば地域の魅力を再発見できるのかといったことを話し合ったりする中で、さまざまな体験をすることができました。

私たちは堅ぐるしいことばかりやるわけではなく、楽しいことも一緒にやってきました。大学には二十歳前後の学生がたくさんいますので、若者のエネルギーをうまく引き出そうと思い、地域のいろいろな祭りに出掛けていって地元の子どもたちとの活動を楽しんでもらいました。その他にも芋に興味を持っているサークルの学生たちと一緒にプロジェクトを立ち上げて、地元の畑で収穫した芋を使って一緒にスイーツを作ってお祭りで売るといったことをやらせていただきました。まちを元気にするために、複数の学生サークルに参加してもらってきました。その中で一つ紹介したいのは、落語研究会の皆さんと毎年開催している寄席です。地域の方と一緒に楽しみながら活動しています。

震災直後の大変な状況を知っていますので、最初は笑ったり楽しんだりすることが何となく不謹慎なのではないかという思いがありました。ここ関西では笑いをすごく大事にされていますよね。笑いとか楽しいことというのは人間が生きていく上で本当に大事なことだと思います。そこで、私はこの地域で楽しいことをもっとやりたいと思いました。楽しいと思えることはいろいろあると思いますが、この地域には年配の方も多く、落語が好きな方も多いですから、落語研究会の皆さんと一緒に地域に行って落語を披露しました。これは落語研究会の学生たちもすごく喜んでくれたのです。というのも東京では落語はあまり受けないけれど、福島ではめちゃくちゃ受けるんだそうです。だからテンションが上がるということでした。地域の方も学生も喜んでくれるという意味ではお互いに得るものがある活動ができたのではないかと思います。

また、単に落語をやって楽しむだけではなく、大学のサークルですので、言葉に関する学びも一緒にやることにしました。ここに一例を挙げていますが、古典の落語は見立てるということをよくやります。例えば、扇子を使って蕎麦を食べる真似をしたり、あるいは手ぬぐいを本に見立てたり小道具として使うのです。この見立てるという行為は古典落語だけではなく、日本文化に深く根ざしています。例えば、枯山水は自然の情景を見立てたものです。古典の中にいろいろな文化的知恵がありますので、こういったものを紹介しています。このような考えで活動を続けていると、原子力災害で苦戦したまちを何かに見立てることができないかと考えるようにもなりました。つまり、今まで大変な地域だと感じていたんだけれども、違う見立て方をすると、そこに新しい魅力が見えるのではないかと。そういったことをまちの方と話すきっかけもできました。

楽しみながら学ぶこともあって、一緒にやる、作り上げるという中で私たちが最初に意図したこととはまた違う、当初思っていなかった想像以上の体験をすることができました。このことを本当に実感したわけです。

ミュージアムに話を戻しますが、ミュージアムを使って「一緒に歩こう会」もやってみました。ミュージアムでは、まちの魅力的な資料を展示していますが、まち全体、あるいはまちを離れて地域全体を見渡すと、さまざまな魅力的な歴史や文化が残っているということが分かります。そういったところをみんなで歩いて回りながら楽しみつつ、健康にも役立てようということで、アートウォーキン

グを開催しました。

われわれは最初、原子力災害からの復興支援のボランティアとして被災地で活動しました。たしかに私たちの専門的な知識や活動を生かしていろいろお手伝いはできたと思います。しかし、そういったお手伝いをしている中で実はわれわれは非常に多くのことを地元から学ばせていただきました。あるいは体験として得がたいものを得ることができたと思っています。今日は皆さまにそういったことを紹介したいと思ってお話をしてきました。

まとめに入りたいと思います。私が福島県の浜通りで被災した方々と関わる中で得たものはサイトスペシフィックな体験だと思っています。サイトスペシフィックというのは聞き慣れない言葉かもしれませんが、これは1960年から1970年にかけて芸術分野で生まれた言葉です。サイトは場所、スペシフィックは特徴的なという意味です。その場所の持つ特性、歴史、環境と不可分な芸術作品や芸術体験を社会的文脈の中で感じるものをサイトスペシフィックアートと言います。

この言葉を持ち出したのには理由があります。ちょうど今月まで３年に一度開催される瀬戸内国際芸術祭が開催されていたのですが、瀬戸内国際芸術祭はサイトスペシフィックアートの成功例だと言われています。ここで、瀬戸内国際芸術祭がはじまった一つのきっかけとして豊島という島があります。豊島は1970年代に産業廃棄物の不法投棄問題によって風評被害を受けた島です。そういった風評被害からの復興の中で芸術祭への参加を決めた歴史を持ちます。最初は多くの苦難があったそうですが、今や豊島は風評被害を乗り越え、瀬戸内国際芸術祭の中心的な島としてサイトスペシフィックアートを体験できる世界的な聖地の一つになっているわけです。豊島と距離的にも近い関西の地で今日お話をさせていただき、サイトスペシフィックな体験をキーワードとしてお話しできたことをうれしく思っています。

福島という地域、そして被災したという歴史的な文脈の中でこそわれわれが体験できたことがあり、その中でわれわれが最初は意図していなかった「支える」から「一緒にやる」という活動に移り変わっていきました。これはまさに福島の地でしか実現できなかった、これこそサイトスペシフィックな体験だったと今、私は感じています。

繰り返しになりますが、われわれは当初、原子力災害からの復旧、復興を支援する立場でした。しかしながら、13年以上の活動を通じて福島の地が教育の場として、大学の資源を有効活用する場として、そして時には研究の場として唯一無二のパートナーになっていることを感じています。さらにこの地域の方々が私自身の教育研究活動に欠かせない協働の仲間となっています。

ここにいろいろ楽しそうに活動する私たちの写真を紹介していますが、こういった活動を通じて、共にお酒を飲む友だちもできました。多くの友人を得たということは、想定外の私の喜びになっています。こういった人と人とのつながりは、今回の講演のテーマである人権とも関係すると思います。

最初にも言いましたように、人権は当然の権利としてわれわれ一人一人が持っているものです。そして人権を実際に感じる局面は、人と人とのつながりの中だと私は思っています。そういった人と人とのつながりを実体験する一つの事例として、今日は福島での体験を皆さまと共有させていただきました。そしてこの後、人権問題について一緒に考える機会を持ちたいと思っています。私からのお話

は以上となります。どうもありがとうございました。

＜質疑応答＞

○司会　秋光先生、ありがとうございました。それでは、ここからは災害復興制度研究所所長の山先生に進行していただきます。

○山　私は関西学院大学災害復興制度研究所の所長をしています山と申します。

今日は人権問題講演会と人間福祉学部で開講している災害復興学の授業との合同開催になりますので、授業を受講されている方と講演会を聞きに来られている方がいらっしゃると思います。近年は年に一度、人間福祉学部の災害復興学の授業と人権問題講演会を一緒にしていただいていますが、テーマが共通している部分がありますので、広くいろいろな方に聞いていただくのがいいかなと思って実施しています。

今日は東京大学の秋光先生に来ていただきましたが、大変分かりやすく、優しく、人柄がよく伝わるご講演だったと思います。大変爽やかな先生で、私は先生が若い頃から付き合いがあるんですが、若い頃から全然変わらず好青年のままです。

それでは引き続き、秋光先生にお話を聞きたいと思います。

まず一つ目は、風評被害のお話がいろいろと出ていましたが、地域の人たちと関わる中で科学者として原因や実態についてどのように考えていますかという質問です。また、それについて対応するにはどういったことが必要かといったことも重ねてお答えいただければと思います。

○秋光　風評被害の問題については、私も震災復興に携わる中で専門の先生から勉強させていただきましたが、複合的な問題だということでした。福島の場合は消費者の方の放射能の汚染が怖いという思いが最初にあったと思います。あるいは先ほどの豊島の問題であればゴミの汚染の問題があって、そういうところのものは口に入れたくないといった雰囲気からスタートするんです。

ところが、ある程度時間が経ってくると、消費者そのものの声よりも、消費者が嫌がるかもしれないと慮って流通させないということが起こります。そして、それまで流通していたものが流通しなくなると別のものに置き換わっていきます。一旦置き換わってしまうと、よっぽどのことがない限り盛り返すことができません。例えば、値段や品質が変わらなければ、敢えて違うものを買おうとは思わないですよね。やっぱり慣れたものを買ったり食べたりすることが多いと思います。

そういったこともあって、一旦風評被害が起きてしまうと、簡単にはそれを解決することができない構造ができてしまうということです。そういった構造を分析することが重要で、その上で何を解決していけば問題が解決できるのかと考えるのが科学です。僕も科学者の端くれですから、これは大事だと思いました。

一方、福島の問題に取り組んだり、あるいは豊島の方にお話を伺ったりする機会がありましたが、情熱を持ってこの状況を乗り越えようとする人たち、そしてその人たちと一緒に働こうとする人たちがいるということが何よりも大事だということを学びました。

まとめますと、社会科学的に風評被害の問題という構造があります。では、それをどのように解決するのかとなると、それにはいろいろな方法、アプローチがあります。しかし

ながら一番大事なのは、情熱を持ってそれを乗り越えようとする人と、その人たちと一緒にやろうとする人たちとのつながりです。そのつながりが原動力になるということを私は目の当たりにしてきましたので、そこが大事だと思います。

○山　一つ質問させていただきたいと思います。今のお話とも関連すると思いますが、例えば、歴史的な保存活動は先生の専門とは違うと思うんですが、専門でない分野まで活動を広げていくきっかけというか、気持ちについて説明していただけますか。

○秋光　これは実はよく聞かれることで、毎回、何と答えようかなと思うんですが、私の専門は分子生物学そして薬学、放射線創薬ということを最初にお話しさせていただきました。普段は研究室にこもって、それこそ皆さんがイメージされるように白衣を着て、試験管の中に試薬を混ぜて、あるいは顕微鏡で細胞を観察して、ちょっといい結果が出るとにやっと笑うという、端から見ると気持ち悪いと思われるような、今風に言うとオタクっぽい活動が自分の本職です。もちろんにやっと笑うのが目標ではなくて、自分なりに夢があって、それを実現しようとしているんです。私の力は小さいですが、薬を通じて少しでも社会に役立つことができればすごいなと。そういった個人的な思いからやっています。

　では、そういった人間がなぜ外に出て福島でフィールド活動をしているのかというと、これは先ほどのスライドにもありましたが、偶然と言うしかないと思っています。福島の問題があって、そこに関わったのは、放射線の研究所に勤めている放射線の専門家である私にできることがあればという思いからであって、当時の多くの大学人が抱えていた気持ちと大して変わりません。できることをやろうと。責任というところまではいかないかもしれませんが、やはり科学者としてできることはやらなくちゃと思ったのがスタートでした。

　最初は放射線の問題を地域の人たちに説明したり、除染に協力したりといったかたちで活動していたんですが、それがどうしてこうなったかというと、本当に偶然のつながりだと思います。地域で仲のいい人ができたり、「また来てください」と言われて、また行くと、「来てくれてありがとう」と言ってもらったりするようになって、ついつい行くようになったわけです。それは自分のプライベートな時間を使ったり、仕事という口実をつけて行ったり、いろんな小技を駆使して行きました。やっぱり偶然の積み重ねがあるのと同時に、そこに魅力があったんだと思います。

　先ほど最後に少しお話しさせてもらいましたが、東京で暮らしているとできないサイトスペシフィックな体験をしたり、そこでしかできないことをしたりすることを通して、それでついつい足を運んでいるうちに14年経ったというところが実際のところかなと思います。

　10年もやっていると、もう第二の故郷のような感じになります。先ほどお酒を飲んでいる写真もあったと思いますが、一緒にお酒を飲めるようになったのがすごくうれしいことだったんです。震災直後はお酒を飲んだり、そもそも笑顔になることすらはばかられました。難しい顔をしないといけないんじゃないかといった感じもありました。それが、だんだんそうじゃなくなって、落語研究会の学生を連れて行って楽しい講演ができるように

なってくると本当に楽しいわけです。楽しいということが自分をそこに向かわせる原動力になったと思います。

最初は偶然から始まったことで、自分の専門とはまったく関係ないんですが、自分の専門とは関係がなくても、ある意味、大学の先生という立場ではない自分がそこに行っているというかたちになります。でもせっかく大学教員なので、そのメリットを生かせればということで、大学の組織の博物館の先生と一緒に活動したり、学生に声を掛けて、興味を持ってくれる人と一緒に行ったりしたんですが、中身は本当に個人的な体験の積み重ねで、そこで得がたい経験ができるから行っているというのが自分の理解です。

ですから、専門は違うと言われると本当に至極ごもっともなんですが、専門は専門としてしっかり研究しつつ、それ以外の自分の個人としての生きがいというか、ライフワークに近い感覚でお付き合いさせてもらっています。どちらかというと、友だちのところに行くような感覚です。

○山　「支える」という活動から「一緒にやる」というところに移行していったというお話があったんですが、その中で最も大事だったこととか、こういうきっかけで関係性が変わったなということはありましたか。

○秋光　具体的にこういうイベントがあったから変わったというのは思い付かないです。本当に徐々にです。申し訳ないんですが、最初は支えるとか、自分ができることをするというような、お手伝いをするような感覚でした。でも、今言ったように、そこに行くことでいろんな体験を積み重ねて、特に友人関係のような個人的な体験を積み重ねていきました。友だち関係って上下関係があったら友だちじゃないですよね。やっぱり対等で、言いたいことを言ったりできる関係が友だちだと思います。実際に言いたいことを言ったりしています。なかば言い合いに近いようなこともあったんです。でもそういうことを乗り越えて、お互いの理解が深まったと思います。ですから、具体的なイベントがあったというよりは、いつの間にかという感じです。

友だちでもそういうのはあるんじゃないでしょうか。何かのきっかけで友だちになることもあれば、いつの間にか友だちになっているという、少なくとも二通りのパターンがあると思うんですけど、その後者に近いような感覚で、特別にこういうことがあったからというわけではなく、時間を掛けて少しずつそういう関係になったというのが僕の認識です。

○山　今、研究もしっかりされて、個人的な関係についても、自分の生き方も含めてずっと関わられているということですが、そういうことができる人はなかなか少ないと思うんです。両方にきちんと取り組めるようになったきっかけはありますか。例えば、学生時代に影響があるのか、学生時代にしていたことが今につながったとか、ここには若い方がいらっしゃいますので、何かその辺でお話しいただければ。

○秋光　それを聞かれると、これを答えるしかないなと。山先生にとっても藤原ゼミの影響が大きいんじゃないでしょうか。山先生と私が知り合うきっかけが大学の教養部なんですが、大学1、2年生は教養課程といって一般的な学問を学ぶ時間があったんですね。そこで心理学を学ぶゼミがあって、それを担当されていたのが藤原勝紀先生だったので、わ

れわれは藤原ゼミと呼んでいます。そこで山先生が一つ上で、僕が後輩という立場で知り合いました。

藤原先生のイメージとして、大学の先生というのは好きなことをやることができていいな、みたいな感覚が残っています。あるいは楽しむことを仕事の一つにしているんじゃないかみたいな感覚があったんですね。そういう意味で、自分の研究活動はもちろん楽しみますが、自分自身が楽しんでいるイメージが藤原先生はじめ学生時代にお会いした先生たちの後ろ姿に残っています。

そういった中で福島での活動も楽しみにつながっていったということが大きいと思います。楽しむことを見つけるというのは、ある意味、われわれとしては一つの正常な状態、あってもいい状態と考えています。

よく学生に、これは私の仕事の一つだからと偉そうに言うんですが、そういう自分の感覚の一つのオリジンは山先生と一緒に学生時代にお世話になった藤原先生の面影があると思っています。どうでしょうか、山先生。藤原先生の思い出は今の山先生のご活動に何か影響に近いものはありませんか。

○山　影響があったと答えないといけない雰囲気がありますが、40年近く前のことですから、私の学生時代と今とでは大分違うかもしれませんし、大学の先生も個性的で、かなりやばい人たちもたくさんいました。そういう自由さというのが大学の雰囲気を作っていたのかなと思います。専門をするのは当たり前。でも、それを超えたところで知的な会話を交わしたり、一緒にいろいろなことに取り組んだりするということが確かにあったと思います。そういうことを考えると理解できます。

○秋光　今はコンプライアンスなんかがあって、われわれはお行儀良くしていなくちゃいけないことが多いんですが、ルールは守りつつも、その中で楽しむということは大学人として大事だと僕は思っていて、楽しいから研究もするし、楽しいから今の自分の環境を生かした活動もできるし、やりたいと思うんですね。そういったことをもっと僕らがやってもいいと思っています。

そのきっかけは、先生が今おっしゃったように、昔の自由な雰囲気が面影として残っていて、そういう意味では、本当に繰り返しになりますが、自分が影響を受けたものとして山先生と一緒にお世話になった藤原先生も含めた恩師の先生たちが挙げられると思っています。そういうこともあって大学に勤めているということもあると思います。

○山　先生自身、すごく楽しんで研究活動や今日お話しいただいた活動をされているようですが、例えば、今日お話のあった福島復興知学に連れて行った学生たちに大きな変化があったなと感じられることはありますか。

○秋光　そうですね。座学で見たり聞いたりする、あるいはメディアを通じて知ったりするのと実際の現場は違うんだということを彼らは実体験として学んでくれています。年寄りじみた発言で恥ずかしいんですが、かつてに比べていろいろなことが便利になった反面、今は何かとバーチャルになりがちだなと思っています。

僕は生物学者の端くれとして、人間も動物である以上、五感を通じた体験は人間の心にとても影響力があると思っています。その人の人生にとって五感を通じた体験をすること

が大切です。その実例として、福島について読んだり聞いたりするだけではなく、味わい、触れ、体験し、学び、再認識する。それを通じて、その人が学びを深めてくれる瞬間があります。それが全ての人に起こるとは言いがたいですが、そういった瞬間を見せてくれる学生を目の当たりにすると連れていってよかったなと思います。

○山　先生の授業を受けた学生の中から、直接福島に関わらなくても積極的に何かに取り組むような人たちも出てきていますか。

○秋光　そうですね。そのように思っています。実際に福島の経験を元にまちづくりに興味を持って、大学４年の研究室ではまちづくり研究室に入った人もいます。自分としてはよかったなと思う気持ちが半分、僕のところに来てくれなくて残念だなと思う気持ちが半分です。でもそういう学生さんが現れているということは、彼の福島の実体験があってのことだと思いますので、それはよかったなと思っています。

　あとは福島で出会って一緒に現地活動をした高校生が私たちの大学に興味を持ってくれて、今年の４月に入学してくれました。そういった人とのつながりが次の新しい展開につながっていると思っています。

　東京の子にとっても実体験を元にした次のキャリアプランにつながったと思いますし、地元の子にとっても将来を考える上でわれわれの大学が候補に挙がったと思うので、そういう意味では、リアルな体験をしたことによる影響があったと思っています。

○山　先生は14年も地域に関わった活動を継続しておられますが、活動で出会った地域の方たちがこんなふうに変わったとか、あるいは地域自体も変わったというふうな何か手応えを感じた経験はありますか。

○秋光　これはわれわれが影響したとは思っていませんし、実際のところはどうか分からないんですが、ただ、一緒にやってきて変わってきたなと思うことはあります。自分たちで何とかしようとする方は、ある程度はいらっしゃるんですが、そういった人たちが点と点でつながっていって線になり、その周囲にまた賛同者が現れて、それが面になっていくような構造ができていく様子は目の当たりにしています。

　そういった点と点とのつながりの一つに、あるいは面になるための周囲のものとしてわれわれが参画できているなと思うことはあります。だからといって、われわれが積極的に影響を及ぼしたとはおこがましくて言えませんが、そういった仲間には入れているんじゃないかなとは思っています。

○山　なるほど。まちのミュージアムが東大の博物館とコラボするとか、これはもう歴史的にも多分初めてぐらい珍しいことだと思うんですが、ああいった取り組みや、あるいは落語などの取り組みを通じて何か変わったなということを感じられることはありますか。

○秋光　変わったなというのは、われわれを仲間として認識してくださっているなと感じることが多いので、その点が変わったところかもしれません。阪神・淡路大震災の時も昨年の能登半島地震の時にもあったと思うんですが、被災地にはボランティアの方が行かれると思うんです。大学の先生の中には研究のために被災地に来る方もいらっしゃるじゃな

いですか。それで嫌な目に遭った被災者の方もおられて、批判的な方がいらっしゃるんです。ですからわれわれが最初に行った時には警戒されることもありました。この人は何のために来たのかなと。わざわざ東大から来て何してんのと。何か偉そうな、みたいな。僕は偉そうには見えなかったかもしれませんが、怪しそうだなとは思われたと思うんです。ただ、最初こそ警戒されていたと思いますが、長年付き合っている中で、少なくともこの人は嫌なことはしないと思ってもらえていると思います。ある意味、一歩進んで仲間と思ってもらえているんじゃないかなと。そんなふうに関係は変わってきていると思います。

○山　確かに先生を見たら、そんなに悪い人には見えないので、そこは大分ハードルは低かったかもしれません。やっぱり人間的な付き合い、顔が見える関わりがあるかどうかが大きいように思います。研究者は研究の専門家として関わるんだけれども、それを超えて地域の人と関わる時には、実はそういう部分がすごく大事だなと私も思います。

○秋光　そうですね。そういう点では、山先生が以前提案されていた媒介する方。あの時は媒介的知識人という言葉を使っておられたと思うんですが、その言葉がここに当てはまるか正確ではないかもしれませんが、少なくとも媒介してくれる方が地域のキーパーソンとしておられて、そういう方が自分たちをある意味導いてくれたと言ってもいいかもしれません。

○山　やはり研究者が関わる時には、地域に受け入れてくれてコミュニケートを取ってくれる人がいないと難しいと思います。一方的に研究者が行っても何もできないという部分があるということは私も思います。

ちょっと話題を変えて次の質問にいきたいと思います。これまでの活動を通して一番やりがいがあったなとか、よかったなといったことはありますか。

○秋光　やりがいという点では、ミュージアムを一緒に作れたことですが、よかったなと思うことは、うまい飯屋を見つけたことですね。そこの店は食事も美味しいんですが、食事処をオープンするに至ったオーナーさんの思いがとても大きいんです。これは話し出すと長くなってしまうんですが、オーナーさん自身が被災されて大変な思いをされたんですが、廃れていくまちを見て自分にできることをやりたいと。だけどそんなに大きなことはできるわけでもない。そういった中で人間にとって大事な食の部分に着目してレストランを開業されたんです。その方は以前、キャビンアテンダントをされていた方で料理は専門ではなかったんですが、料理を勉強されて、今はすごく美味しい料理を作られています。古民家を買い取ってレストランに改装されているんですが、すごく素敵なレストランです。そういったレストランを見つけて、現地でうまい飯を食べられることが一番うれしかったことです。

実は被災直後は現地ではまともなご飯が食べられなかったんです。放射能が残っていたから食べられなかったわけではなく、何も売っていなかったからです。自動販売機も止まっているんです。東京から何か食べ物を買って持っていかなければなりませんでした。だから冷えた弁当とぬるくなったウーロン茶しかなかったんです。

復興が進んでくると、まちを何とかしたいという意欲のある方々が食べ物屋さんを作ってくれました。しかも単なる食べ物屋さんではなくて、本当に気持ちのこもった、地域の文化に根ざした四季折々のものを出してくれるんです。そうしたところを見つけられた時はよかったなと思います。実際にそこに足繁く通うのは自分の楽しみです。

○山　あとで詳しく教えてください。

○秋光　もちろんです。

○山　そろそろ時間なので、最後の質問をしたいと思います。関西学院のスクールモットーは“Mastery for Service”で、「奉仕のための練達」と訳されます。隣人や社会、世界に仕えるために自らを鍛えるという理念がありますので、関西学院の学生は海外も含めていろんなところに出掛けていって、実際に社会貢献活動をしている人たちがたくさんいます。でも現地にいると難しいこともあると思うんです。そういった方へのアドバイスと言いますか、こういうことをしたらいいよとか、こういうことが一つのキーとなるよといったことがあれば最後にお伺いしたいと思います。

○秋光　なかなか一言では言いづらいですが、私の体験から言うと焦らないことが大切だと思います。私も最初は警戒されるという体験をしているんですね。最初の頃は、嫌な気持ちにさせてまで僕らが行かなくてもいいんじゃないかと思うこともなきにしもあらずでした。でも、できることがあればやらなきゃと思って行っていた中で時間を重ねて関係を作っていきました。その経験から考えると、早々に判断せずに長いスパンで付き合う気持ち、あるいはこちらの余裕のある気持ちが大事なのではないかと思います。

また同時に知的側面からもそういった気持ちを支えることが大事だと思っています。先ほどもお話ししましたが、風評被害には構造があるとか、あるいはボランティアや支援の関係作りについても学術的な理論があると思うんです。そういったものを勉強しておくと気持ちを支える際に役立つと思います。

手前味噌ですが、大学人ですから講義や授業を通じてしっかり知識を蓄えて、そしてそれをもとに折れない心を支える知的基盤、理論的基盤といったものを作っておくことが大事なのではないかと思います。以上です。

○山　今日は本当に貴重なお話を伺うことができたかと思います。秋光先生、どうもありがとうございました。

秋光　信佳　氏（東京大学アイソトープ総合センター　教授）

■講師紹介

旧採炭地である福岡県飯塚市に生まれる。1994年九州大学薬学部卒業、1999年博士（薬学）取得。1997年九州大学薬学部助手、2000年東京大学薬学部助手、2003年フリードリッヒ・ミッシャー研究所（スイス連邦国）博士研究員、2005年産業技術総合研究所研究員、2008年東京大学アイソトープ総合センター准教授を経て、2014年より現職。分子生物学、生化学、放射線創薬を専門としており、福島第一原子力発電所事故時には放射線に関する専門家として被災地で除染等のボランティア活動に従事した。